

# 「見えないもの」が見せてくれるもの

## ——長嶋有「猛スピードで母は」論——

疋田雅昭

長嶋有「猛スピードで母は」(『文学界』二〇〇一年一月)は、第一二六回芥川賞受賞作であり、既に「サイドカーに犬」などで文学界新人賞を得ていた長嶋の名を不動のものにした。芥川賞受賞の際の選評は、主として内容面と表現面についてのコメントに大別出来る。

時代に適応できない家族・親子を描くのではなく、状況をサバイバルしようと無自覚に努力する母と子を描いたのだった。

こう評する村上龍は「勇気を得る」作品と述べている。内容面に関しては、こういった母子の情に対して肯定的に読むものが多い。二〇年ほど前のノスタルジーであるよりも、親子関係が実在した最後の時期を描いていると評価する池澤夏樹の言説も同様のベクトルを有していると言える。しかしながら、表現面に関しては、賛否両論ある。たとえば、宮本輝は以下のように述べる。

私はこの小説の軽さに納得できない。長嶋氏の文章は、ここ数年で類出した軽やかな文章の延長線に生まれた「メソッド」にすぎないという気がして、私は受賞に賛同できなかった。

こうした意見に対し、黒井千次は「見る者と見られる者との距離が巧み」であるとしその構造が母と子の内容面にもよい影響を与えているという見方を示す。高樹のぶ子は「視点を幼く据えた書き方(幼さ装い)の弱点である認識の小ささや小説全体としての情報の少なさ」を「会話」がフォローしていると述べており、日野啓三は「幼いはずの視点人物が

無意識のうちにとっている「距離感」の見事さ」を評価する。

だが、本論の関心は、こうした形式面への賛否ではない。紙幅の関係を考慮したとしても、選評では、この語り手と語られる者たちとの関係と物語の構造自体とが密接に関連し、かつ非常によく練られたものであるという視点が欠けているのではないだろうか。もちろん、それは形式と内容が不可分であるといったことを証明しようとしているに過ぎないという指摘もあり得るだろう。だが、ならばそれらとこの小説に刻まれた様々な時代の刻印をどう考えるべきなのか。実は、こうした問題系こそが、長嶋の物語を考える基本的な態度を提供してくれるのではないかと思われるのである。

### 一 時代の刻印としての物語

何度か雪が降り、いよいよ積もりそうになると母は車のタイヤ交換を手伝わせた。／母は団地の共用物置からスパイクタイヤを取り出すと片手に一つずつ持って駐車場まで歩く。慎はアスファルトの道にタイヤを転がし、その後ろをちよろちよると付いていった。時折あらぬ方向に転がり出したり倒れかけるタイヤを手でおさえてもとに戻しながら進む。規則的な配列でスパイクピンの突起が並ぶタイヤはごつごつとしていかにも頼もしく思える。

(本文引用の「」は改行を示す、以下同様)

多くの物語がそうであるように、何気ない冒頭に語るべきことは殆ど語られている。語り手は、主たる登場人物の二人を「慎」「母」と呼び慎を視点人物としての内的焦点化している。「スパイクタイヤ」は、アスファルトなどの路面を削り取ってしまう欠点から、一九八三年の札幌市の条例を皮切りにスタッドレスタイヤに置き換えられ、一九九〇年の法律制定により、現在はほぼ使用されていないのは周知の事実だが、実はこの物語はこうした特定の時代の刻印を強く刻んでいるという特徴がある。

さらに、この物語には、一見見逃してしまふような細かいアイテムやエピソードが実に要領よく回収されてゆく伏線の妙もある。そういった意味で、土倉ヒロ子の「作者の思い入れとか感傷抜きに（もの）を生かしている」という指摘（『長嶋有』『猛スピードで母は』と『ジャージの二人』『群系』一二二号 二〇〇八年二月）や河野多恵子の「事物の展開にも、文章にも無駄がない。省略の効果をよく知っている」という選評は首肯出来る。

車は白いシビックだ。ヘッドライトは丸く、フロント前部についたミラーは昆虫の触角のようだ。母が本当に好きな車はワーゲンのピートルで、走行中にみかけると、ハンドルを握ったまま顎で慎にもみるように促したりする。だから何度か買いかえの話がでると、今度こそ念願のワーゲンにしようかと思ったがそうはしなかった。それはそれで照れくさいからと母はいった。子供の間ではワーゲンをみると幸福になるというジンクスが広まっていたが、母はそんなものには信じないといった。ただ好きなだけだ、と。

宇佐和通（『続あなたの隣の「怖い噂」―都市伝説は進化する』学習研究社、二〇〇四年三月）によると、ワーゲンが幸せをもたらすという都市伝説は「見る」「触る」「乗る」などの細かい差こそあれ、全国的に見られるものであったという。また、スーパーカー・ブームを背景に庶

民に手が届く「スーパーカー」の一つであるという認識もあり、旧型ピートルのその形状も流通量も街中で見かける確率が丁度よかったという指摘もある。

むしろ、このワーゲンもラストシーンへの伏線となっているのだが、こうした全体構造への接続よりも前に、もう少し細かい時代や設定の問題について考えておきたい。

物語の舞台は「M市」。「四十キロ離れた」ところに「S市」があり、その間を「国道」が結んでいる。厳密にこの条件を考えると実は相当する地域はない。しかしながら、物語の「水族館」の描写等から考えると、「M市」は室蘭市を舞台に想定していると考えられる。室蘭市から国道三六号線を上ってゆくと白老町があるが、ここは物語当時の現在も「町」である。母の実家に相当する場を「市」と設定したこの意味は、作家論的な問題を含むため本論では触れないが、物語に登場する様々なアイテムは明らかに時代を刻んでいるものばかりである。

「まんが日本昔ばなし」「クイズダービー」「八時だよ全員集合」などのテレビ番組は、七〇年代後半から八〇年代前半の子供たちにとって、土曜のゴールデンタイムの定番であった。また、「八時だよ全員集合」の裏番組として時代劇の枠があったため、八〇年代後半にビデオ録画が普及する前までは、土曜日の八時台にどちらの番組を見るかはその家庭の「チャンネル権」や家族内での関係性と関連していた。

「新・おぼけのQ太郎」は、六〇年代に爆発的なヒットとなった漫画が一度六六年に終了し、その五年後の七一年に再び漫画とテレビアニメで開始されたものだ。こうして見ると、物語の多くのテレビ番組がTBS系のものであることに気がつくが、七〇年代後半から八〇年代初頭は、TBS系の番組が強い時期でもあった。また、これは物語の舞台となっている当時の室蘭の民法局との関係もある。

『手塚治虫漫画四〇年』は、一九八四年一月に秋田書店から刊行されたものだが、この時期になると手塚治虫ら戦後黎明期の漫画家が自伝的な形でその歴史記述をはじめ、「トキワ荘」系の漫画家などいわゆるその弟子筋にあたる世代が、漫画の指南書を多く刊行し始めた時期でもある。物語に出てくるGペンや雲形定規などの道具は、それらの本で必需品として紹介されているものばかりである。

体育のマット連動の時間あまり格好悪いころをみせ続けるといじめられるかもしれない。今は跳び箱の跳べない子がなんとなく意地悪されているが、標的は常にうつろいやすいものだ。

一九八六年の東京都教育委員会調査報告では、「運動神経の欠如や体力や力が目立って弱いことが、体育の時間や課外活動で露呈されたこと」がいじめの原因として三割以上を示すことが挙げられている。ここで、慎がマット運動での失態を気にしていることは、一見過剰に見えるかも知れないが、いじめに対する直感的な危機感が当時の子供たちに内在していたことを示している。また、物語においても、この「直感」は現実のものとなる。

しかし、こうした時代の刻印は、物語のリアリティという側面以外にどういった意味があるのだろうか。本論では、それを語り手との関係で考えてみたい。

## 二 母と家族の物語

スパイクタイヤは凍り始めた路面をがっちり掴む。ずっと乗っていると助手席にいても感触の違いが分かる。慎はスパイクというものに憧れがあった。

以前から、底にスパイクのついた冬靴が気にかかっている。踵に鉄の爪がついており雪道でも滑らないという。学校の男の子たちの

多くはそれを履いていた。(中略) 慎はそれが欲しいとは言えずにいる。母は子供だましを嫌う。実際、普通のゴム底の長靴でも凍っていない道を選んで歩けば滑ることはなかった。

ここでの「スパイク」タイヤは、後に展開される須藤君のサッカーの「スパイク」のエピソードの伏線でもある。さらに、「スパイク」タイヤを履いた車は、この親子の唯一の移動手段である。この物語は、M市とS市を物理的に「猛スピード」で移動する親子が描かれると同時に、時間的な移動(母子の生活史)が描かれる物語でもある。

靴屋では慎はいつも母を苛々させた。

「ちょうどいい?」と問われても、きついかぶかぶかなのか、きついのが我慢できるのかできないのか、自分のことなのに自信がもてない。

ここでの「靴」のエピソードは、慎と母の性格を比喩的かつ対照的に物語っている。欲しいものをなかなか言い出せないばかりか、自分の嗜好すら意識できない慎と、強い拘りを持ち気に入ったブーツは即決して買ってしまふ母。

言葉の使用に厳格な祖父と言葉の感覚が独特な母。質素で儉約な祖母に対し欲しいものに物怖じしない母。分かりやすい形で孫を溺愛する祖母と一見無関心ともとれる位に距離感をもって接する母。興に乗ればものすごく話し出す母親とそれほど会話を得意とはしていない慎。こうした、対比構造が家族それぞれの性格を明確にしている。しかし、こうした見た目の対立の背景には、見えない絆の様なものがある。この物語は、そんな語れない何かにたどり着こうとする軌跡でもあるのだ。

母がいない昼間も慎は二階にいるのを好んだ。一階に降りれば、やさしくて甘い祖母がすぐにおやつを出してくれるのは分かっている。それでも暗い部屋でほんやりとしつづけた。あるいは一人で絵本を

めくった。母ならばどこにけちをつけるだろうと考えながら。

物語で繰り返される実家の「二階」という空間の把握。これは、田舎に對する嫌悪感、世代同居家族であることに加えいわゆる「出戻り」という意識が捨てられない母、そんなS市の実家での生活において、実際の母親の不在に関わらず、慎にとつても母子の密室的空間が重要であったことを示している。むしろ、これは母子のシビツクの内との空間的相同性でもあり、慎が最も大切にしようとした場でもある。

慎との会話に見られる母の態度は、ある種の冷たさを感じさせる面があるが、この母の態度は物語中では首尾一貫している。逆に言えば、こうした言語コミュニケーションの外部において親子関係を構築してゆく物語であると言える。母は慎の行動にあえて指針を与えないが、二人の「場」が他人による侵犯を受けずに自立していることは重視する。この教育方針が、慎の決定出来ない性格を形作っているとも言えるが、独省内省により考えるという態度を形成させているとも言える。この「場」は、いわゆる「排除と包摂の論理」（宮台真司）とは異なる関係性である。

外国にいる男と再婚したら、母は仕事をやめて家にいるようになるのだろうか。カラメルまで手作りのプリンを、たとえば家に遊びに来た須藤君にふるまったりするだろうか。たまに夫婦喧嘩などとして、下の階の子供に変な空想をさせるだろうか。

家族社会学が「欠損家族」という語を学術用語として定義していることから分かるように、「理想」の家族という理念は、八〇年代の多くの子供たちにある種の「劣等感」を植え付けて来た。八〇年代のサブカルチャー表象において、問題のある子供の家庭の多くは「欠損家族」である。両親の居る家庭、母が専業主婦である家庭、友人が遊びに来る家庭への憧れ。しかしながら、一見サブカルチャー的な手法で描かれるこの「欠損家族」はそうした理想の家族との対照として見るのが一概に

は出来ないという点に、その批評性がある。

### 三 慎と慎一の物語

この語り手は、視点人物に「慎」と客観的な呼称を与えておきながら「慎」にだけ内的焦点化しているため、視点人物越しの心情には常に類推的な語彙が伴う。物語の中には確実な語りの現在を特定し得る語が見いだせないが、少なくとも語り手の言葉には、小学生には理解しがたい語彙が多く含まれていることは分かる。こうした設定が語り手と慎の距離感を巧みに現出させていることは既に「選評」からも見てきた。

もちろん、「慎」という呼称は、この物語が自らの体験を振り返っている読みを一端は保留にしようだろう。しかしながら、先に見てきた様な物語に散りばめられている時代の刻印から、それを「慎」のおよその年齢と重ねあわせた時、そこに透けて見えるのは、作者である長嶋自身の経歴と非常に近いという事実である。時代確定可能な様々なモノ・コトが、作者と語り手と慎を重ね合わせた読みに誘ってくる。

遠くの雲の間から陽の光が差し始めた。慎は前部のバイザーを倒した。挟まれていた紙片が落ちてきた。拾い上げるとそれは写真だった。母と一緒に知らない男が写っている。母は前を向いたまま左手を伸ばし、慎の手から写真を取り上げた。

視点人物が限定されたこの物語は、慎と慎一の物語でもある。形式の制約上、母と慎一の物語にはなり得ない。だが、これは単なる形式的問題以上の意味を含んでいるのだ。

母に恋人らしい男性のいたことはこれまでもあった。何度か紹介されたこともあるが母はどの男も「恋人」だとはつきりいつたことはなかった。名字を「さん」付けて教えてくれるだけだ。慎のことは呼び捨てて相手に紹介した。

こうした歴代の「恋人」とは「二度、三度重ねて会うのはまれ」であった。こうしてみると数度会っており、「特別おもちゃのプレゼントを買ったわけでもない」慎一は、歴代の男とは明らかに異なる存在であった。ここでも対比により慎一のイメージが明確にされている。

それから、両親と別居していた母が慎一をつれて「車で九十分近くかかる」「M市からS市へ車で「移動」した目的は慎一との交際の報告であったが、祖父母にはあまりいい印象を与えられなかった様である。しかし、母は一度決めたことは決して曲げない。

食べ終えると母はさっさと帰り支度を始め、すぐに出発した。来るとき対向車線を挟んで右手にあった海岸を今度は左手にみながら、母はまた猛スピードで飛ばした。

先にも述べたように、この物語は、空間的にも時間的にも母子の「移動」の物語である。それが「猛スピード」であることは、慎一からみた母の生き方の比喩でもある。

慎一が慎一に出会ったのは、公民館での演奏会の時だった。

たまたま同じタイムングで入った誰かの父兄だろうなどと慎一は思った。慎一は口に縦笛をくわえながら上目づかいにみた。母と男が暗い通路を歩いて一番後ろの客席に並んで腰掛けても、まだあの人は誰のお父さんだろうなどとぼんやり考えていた。

それがあの「外国にいる男」だった。公民館の駐車場で紹介された。この時の慎一の印象は、母と慎一が誰の目から見ても父母の様に見えることを示している。帰りの車の中でも「母が助手席に座っている光景があまりに異様にみえて、なにも考えられなかった。自分が後部座席にいるのも変な気分だった」と、従来母子の空間の象徴であった場に他者の存在があることの違和感をぬぐい去れない。

「私も漫画家になりたかったんだ」そういうと自分の部屋から布に

包んだものを持ってきた。テーブルの空いたところに布を広げると、ペン軸やインクボトルや定規が出てきた。ところどころ穴の空いた変な形の板には見覚えがある。慎一が触れると「雲形定規」と母はいった。それから順番に「烏口に、九ペンGペンカブラペン」と調子をつけるように他の道具の名前を覚えてくれた。

慎一に何となく話してしまった漫画家という将来の夢は、思いの外、母と子そして慎一を結びつけた。この時慎一がくれた「手塚治虫漫画四十年」という分厚いサイン本と「君も漫画家になろう」という入門書、そして母親がくれたペンや定規といった道具類。こういったものが、当時の漫画を象徴するものであったことは、前述した通りだが、これらを媒介に三人は家族に近づきつつあるように見えた。

「シビックよりも車高が高く、登るようにして」「助手席に乗り込」むジープの車内における慎一と慎一の様子は、シビックにおける母子との空間との対照がある。注意すべきは、両者が決して優劣の関係ではなくそれぞれに快い場としての側面が描かれていることである。

遊園地での二人の様子はまるで休日の父子であった。描かれるエピソードは、やはり典型的な父子のそれであるが、二人の距離はますます縮まる。

「慎君は面白いなあ」といつて笑った。そしてあつという間にアイスを食べ終えてしまったので、また少し気を許した。昔母に紹介された男の一人は、慎一にあわせて甘いものを買ったくせに、ほとんど食べないで捨ててしまったのだ。

今までの男と比較されることにより、慎一はますます慎一に好かれてゆく。二人は、トドのサクラのショーも見学するが、そこにはあの「寂しい」姿は見られなかった。

しかし、慎一と母の仲が深まることは、これまでの母子の場が終わり

に向かうことも意味していた。慎一と母が事故にあった日、慎は自分だけが新しい場から排除されるような不安におびえた。

その直後に自分は置き去りにされたのだとひらめいた。もちろん母は書き置きを残すような真似はしないはずだ。

ここで描かれるのは、新しい家族に自分が入れるのかという期待と不安である。だが、こうした不安も期待も結局は杞憂となってしまう。事情も分からないまま、慎一は通ってこなくなってしまうのだ。

慎が慎一と再び再会したのは二ヶ月後祖母が交通事故にあつて入院した病院であつた。

「サクラが結婚したよ」と慎はいった。

「ほんとうに？」慎一は驚き、笑った。

「〇市の水族館からお婿さんがきた」

「そうか俺も結婚するんだ今度、と慎一はいった。笑顔をみせたが、すぐにひっこめた。

サクラの話を媒介にして慎は慎一の結婚を知ることになる。これは、物語上は偶然のことであるが、「寂しさ」の象徴であつたサクラは、再び慎と母に「寂しさ」を運んで来ることになったのだ。物語においてサクラは慎と様々な人物を接続する重要な機能を担っている。

「こないだ病院で、慎一さんにあつたよ」

「こないだって、いつ」母は驚いた様子だ。慎は最初から説明しなければいけなくなつた。水の流れるトイレでの出会いから、交わした会話まで。すべて明るく喋つたあとで、母の気配が一変していることに気付いた。

一変した母の様子を見て、母の恋愛の成就が成し遂げられない原因を、自分の存在と結びつける慎。この発想や展開も母子物としては、オーソドックスな展開である。おそらく、ここで起こつた一連の出来事は、全

て非常にありふれた型の物語であると言える。

にもかかわらず、このオーソドックスな物語を語り手は何故に語つたのであろうか。慎と語り手は、実在の作者の履歴を媒介にして非常に近い存在となる。慎を相対化有しながらも、慎に視点を限定しあくまでも寄り添おうとする語り手。この語り手と慎の関係が、快いアイロニーを生じさせると同時に、大人の慎が自らを振り返っている解釈をも可能にしている。

おそらく、この語り手は慎にとって、慎一は唯一、母子の場に介入出来たかも知れない存在だったのであろう。多くの男を「猛スピード」で通り過ぎてきた母との生活の中で、唯一の存在。そういったものとして、慎一は特権的に語られているのではないだろうか。この物語は、実現することのなかった理想の父的存在として、慎一を思い出しながらも、母子が支え合つて生きて来たことを確認しようとする慎による物語なのである。

#### 四 慎と須藤君との物語

母の結婚相手について分かつたことは今は外国に在るということだ。翌朝、慎は須藤君に「外国っていつたことある？」と聞いてみた。須藤君は同じ公団のB棟に住んでいる。おとなしい、いつも困つた表情をした少年だった。

須藤君は、同じ学年の子である。同じクラスになつたことはないが、同じ団地に住んでいる。会話が弾む関係ではないが、長く一緒に学校に通っている。慎にとつてあまり会話の必要がない須藤君との時間は、母と居る心地よさと相同性があつた。

須藤君はその次の日も慎と一緒に黙って帰ってくれた。

「誰とでも仲良くしなきゃ駄目だつて父さんが」団地の側までくる

と小さな声で須藤君はいった。一緒に帰ってくれないと自分が困るのだといったげだ。受け取りようによっては腹を立ててもよい理由だ。しかし慎は感心した。

父の言葉を守る須藤君は、母から特に何かの注意を受けることがなく自分で何かを決めることが苦手な慎とは相反的な関係もある。

また、二人の下校時に共通したエピソードとしてトドのサクラを見ることがあった。

二重の金網越しにだが、入場せずに毎日トドの様子をみることでできる。

この日も二人は金網の前で立ち止まった。立ち止まりたくてそうするのは慎で、須藤君は付き合ってくれているだけのようだ。

団地のすぐ裏にあるこの水族館もアトラクションの様相から室蘭水族館をモデルにしている。ただし、実際のサクラは一九八三年生なので、物語のサクラの「三才」という年齢設定をそのまま受け取ると他の設定と大きな矛盾を生じさせてしまう。だが、もちろん、大事なものは現実とのズレの指摘ではなく、かなり時代の刻印のある物語の中に何故にずれた設定を導入したかにあり、これまでの考察でサクラの変化およびサクラが媒介者として果たす役割が物語上重要であることは否めないだろう。

翌朝母に前夜の音のことをいうと、サクラでしょといわれた。意味の分からずにいる慎にトドのサクラが寂しいんだよ、と母は言い直した。

サクラは、母によって「寂しい」存在として規定される。この「寂しさ」は、後にサクラがパートナーを得ることによって相対化されることになるが、慎にとつてその理解にはもう少し年月が必要であった。

語りの現在からの距離感によって気がつきにくいだが、そもそもこの物

語は、物語内容において慎の「成長」という要素が薄い。野球部という課外活動を通じての須藤君「成長」にも慎は気がつけずにいた。以後、須藤君との距離はどんどん開いてゆく。

そんな須藤君との「再会」は、母にいじめられている事実がばれてしまった最悪のタイミングであった。しかし、須藤君は以前と同じ様に何も聞かない。久しぶりの二人の登校の様子は以前と変わらなかった。だが須藤君は確実に「成長」していた。

「今日も朝練？」慎はきいてみた。

「うん。もうすこしたら屋内練習になるけど、今が一番寒いよ」

須藤君は気弱そうにいったが、それでも久しぶりに改めてじっくりみると須藤君の肉体はがっしりと引き締まり、背もずいぶん高くなっている。

「でも、少し前からスパイク履かせてもらえるようになったんだ」というと、袋から黒いスパイクシューズを取り出した。そして靴底を上にしてスパイクをみせてくれた。

恐らくこの「スパイク」とは、母子を包んで疾走する車のそれ、そして慎があがれていた滑り止めの用のそれと関連づけられている。しかし、あくまでファクションとしてしか意味をなさない慎の「スパイク」だけは手に入ることにはなかった。「スパイク」とは確実に前を歩いてゆくための道具であったからだ。

「最近、あまり夜中に鳴かないよね」と須藤君はいった。水族館のプールの前だ。今は結婚してつがいになったトドを二人で眺めた。須藤君もトドの声を気にかけていたのを六年間、知らずにいた。

しばらく二人は立っていた。須藤君は慎の横顔を何度かのぞきこんだ。

「なんで泣いているの」須藤君はいつもより困った口調でいった。

慎は上着の裾で顔をぬぐうと「これ預かってくれない」といって手塚治虫の本を手提げごと須藤君に渡した。

トドもまた「成長」していた。「寂しさ」の象徴であったトドはパーナードを得て鳴かなくなった。慎もこのままではいられない。慎があげた漫画本は、慎自身が前に進むためにどうしても必要な抵抗であった。

## 五 霧の物語

夜遅く帰宅した母はいつもよりぐったりとしていた。取り立てではなく、霧がすごかったという。フォグランプを点灯しても、対向車がぬっと目前に現れるので怖くてしばらく動けなかった。M市は雲だけでなく霧も頻繁にでる。しかしこんなすごいのは初めてだったと母は半ば感心している。

「濃い霧に包まれると、狭いような広いような気持ちになる」という母の台詞は意味深である。実は、物語においてこの母子関係は「霧」を境にちよつとした変化を繰り返すのだ。この霧の翌日、母は学校からのプリントを読む。

今まで参観とか面談とかいったものを避け続けてきた母であったが、担任の家庭訪問を避けるためにしぶしぶ学校へ出向く。

母は先生と面談があるという。慎は一人で先に帰宅した。母の帰りはまたしても遅かった。母はなぜか上機嫌でおみやげにフライドチキンなど買ってきた。慎はお茶漬けを食べ終えていた。

「どうだった」

「うん。どうってことなかった」子供がとぼけるときのような返事だ。

六月に公民館で行われる合奏会にも来るようにいわれたとだけ教えにくれた。

面談を終えた母親の帰宅が遅かったことや機嫌がよかった理由は不明

だ。だが、公民館での合奏会に慎一と訪れたことから何かしらのやりとりがあったことが類推される。詳しい背景は類推の域を出ないものの、一回目の「霧」以後、母親は学校行事に参加するようになり、そしてそのことが慎一と慎の出会いに繋がったのである。

帰りの峠道で濃霧が発生した。誤って突っ込んできた対向車を避け、道を外れたジープは急斜面を転がり落ちた。百八十度回転して静止した車内で朝まで過ごしたという。

その後助けが来るまでが大変だったと慎一はいうが、電話口の声は元氣そうだ。

二回目の霧は、母とともに慎一を巻き込んだ。大きな事故ではあったが、母はかすり傷一つなく、慎一は腕の骨折だけですんだ。事故を経験した二人は、何か大切なことを共有した様に饒舌になり、慎には仲を深めたように見えたのだろう。

だが、この「霧」は二人の仲を決定づけるきっかけとはならなかった。この日を境にだんだん家に来なくなった慎一と母の間に何があったのか。やはり、視点人物である慎には分からない。確かに、この視点人物の設定は物語に多くの空白を生じさせているものの、それが全体の欠点に繋がらない妙がある。それは、この母子のコミュニケーションが言語による状況説明に依存していないからだ。

人と人とは関係というものがあって、それは続いたり、盛り上がりたり、だからだしたり、ときには終わったりするのだと慎はもう知っていた。須藤君と長く続いた登下校もだし、祖父母宅への訪問もごく無沙汰になっている。

慎にとつて「成長」の薄い物語であったとしても、そこに学びは存在していた。人との関係が一過性かもしれないことを学びながら、その学びは、母子二人の強い絆に反転してゆく。だが、結局この二回目の「霧」

は、慎一と母そして慎との関係が終わるきっかけとなってしまった。

母と祖父が病院にかけつけていた時間、体育のマット運動で三半規管をおかしくした慎は給食の後で食べたものを全部戻していた。連絡を受け、保健室からそのまま早退した。吐いた後始末をした日直当番の子に一言謝っておきたかったが、先生がしきりにせかすので仕方なかった。

マット運動の出来次第によっていじめられるかもしれないという慎の予感はこのエピソードをきっかけに現実のものとなってしまった。さらに、学校で嘔吐してしまうという失態もこの動きに拍車をかけてしまった。

葬式を終えて帰ってくると慎は学校でいじめられるようになってしまった。突然背後から牧草地に突き飛ばされたり、変なあだ名で呼ばれるようになった。いじめは慎にとって納得のいく、というか、辻褃のあう話だった。吐いた後始末が出来なかった時点で、こうなることはなんとなくわかっていたのだ。

慎が学校での惨状を誰にも相談しようとしなかったことは、これまでの慎の性格設定からすれば、無理もない話に思われる。しかし、この状況に対する慎の内省は、現状肯定以上の何の解決をも生み出さず、いじめはエスカレートしていった。

母と慎一との性的関係をからかひのネタにされ、自分の名前を団地の壁に悪戯書きされる慎であったが何も抵抗出来ない。せめてその事実が母に伝わらないことで自分を納得させるしかなかった。

三回目の「霧」は、祖母が亡くなった心労により病気になる祖父を支えるため、S市の実家とM市の団地を往復する生活をしていた一二月のある日だった。団地の鍵を車にインキーしてしまった母子は部屋に入らず途方に暮れている。部屋の中に入っていじめっ子たちに取り上げら

れることになる手塚治虫のサイン本を学校にもってゆかねばならないことを慎は母に告げられずにいた。

霧が出てきた。霧は土手の向こうからきて、団地全体を包み始めている。／「わかった、もう」と母はいった。なにをどうわかったのか、母は慎を押しつけるようにして歩き出した。団地の側面まで行くと梯子に手をかけた。そのまま上を見上げている。夜が明けつつあった。慎が追いつくと／「誰かこないか見張ってて」といって母はブーツを脱いだ。でも、という言葉を飲み込んだ。

母親は壁をよじ登りベランダから部屋に入ろうとしている。ここを母が登ることは、あの落書きを見られることを意味する。

母はどんどん登っていった。中学生の「こえーよ」という叫び声。四階から落ちた女の子。Cの横のくだらない落書き。ジャッキを回す母の手。慎はなにもいうことが出来ずに立っていた。足下にはたった今脱いだブーツとストッキングがある。ブーツは去年の冬に買ったものだ。ストッキングはブーツの上丸めて置いてある。ずっと背にも似た光景をみたことを思い出した。

こうしたさりげない場面においても様々な小さな伏線を回収しつつ、物語での慎の心配は頂点に達する。

突然目の前に姿をあらわした母に慎はぶつかりそうになった。お互いすこし驚いて、顔を見あわせた。母はだらんと下げた手に手提げ袋とキーホルダーを持っている。

母は慎がついた嘘についてその時は何も言わなかったが、もちろん全てに気がついていて。その事実はやはり車の中で告げられる。

「僕が書いたんじゃない」中学生がやってきて、僕の名前で勝手に書いたんだ。正直にいつてみると、それはなんでもないことだった。「馬鹿が多いんだね」母は眉間に皺を寄せて、煙草をふかした。

「おじいちゃんずっと一人暮らしたと寂しいから、私たちが引越  
しをしなきゃ」

「うん。いいよ」

「今度の学校も馬鹿がいらないとは限らないよ」母はすでに吸殻でいっ  
ぱいの灰皿に煙草を無理矢理押し込んだ。

「平気だよ」自分でも意外なほどきっぱりとした言い方になった。  
母は慎の横顔をみつめた。

母が最初から全てに気がついていたのかまでは分からない。だが、母  
は母の問題、慎は慎の問題にそれぞれの方法で立ち向かってゆくしかない。  
この二人は側でお互いの横顔を見つめている。しかし、その視線が  
交差し合うことはない。車は疾走しているからだ。二人は常に前を向い  
ている。お互いが見ている先は同じではないかもしれない。同じものを  
見ているわけではないが、同じ何かを共有して来た。車内の場とは、そ  
んな母子関係の象徴であるのだろう。

三回の「霧」は新たな家族関係の結節点である。「霧」は通常周囲が  
見えなくなるメタファーとして考えられがちである。しかし、「霧」の  
後は、それまで見えなかったものが見えるようにもなる。保護者として  
の母、父になり得なかった慎一、いじめを言えなかった慎。「霧」はこ  
れまで見えなかった関係を可視化し、この母子関係を新たな局面に導い  
ている。それは「成長」とは言えないかもしれない。だが、こうして母  
子の物語はともに進んでいるのである。

二人の乗ったシビックはワーゲンに先導される形で早朝の国道を  
走った。慎は母が喜ぶと思えば嬉しくなった。しかし見通しの  
よい上り坂になって前方をワーゲンばかりが行進するのを見ている  
うちに母は胸に何かがこみあげてきたみたいになった。母はまた煙  
草をくわえ火をつけると、アクセルを思い切り踏み込んだ。

母は「子供だまし」が嫌いである。憧れの車を抜き去って行きながら  
母は疾走する。そのためのスパイクタイヤは換装済みだ。既に「猛スビー  
ド」で疾走するために十分な準備は出来ていたのだ。そして、ようやく  
それを語る準備が慎にも……。

(ひきたまさあき 東京学芸大学准教授)